

TWINSBURG

私は二人の母、エラルダとジュリアナに育てられました。双子であることを自身の存在の究極の証とした、二人の素晴らしい女性たち。二人は同じ身体で暮らしていました。同じような服を着て、同じように髪を整えていました。お互いが鏡に映っている自分を見るようで、一人が分身の術で二人になったかのようなものでした。まったく同じに見える二人の母が同時に存在する毎日、それが私の世界でした。

二人がカフェに座って微笑んでいる様子を思い出します。一緒に家でくつろいでいるところも。彼女たちには、遺伝的な連帯感を持つということ以上に、他者が入り込むことができない不思議な親密さがありました。それは彼女たちが生まれるずっと前から受け継がれてきた、目には見えないルーツからの約束ごとでした。

学校で私には二人の母がいると言ったら、先生はとても心配そうな顔をしました。私にとっては、それがごく自然なことだったので、自分の家族が風変わりであるとは考えてもみませんでした。どちらが産みの母であるかということさえも気にしませんでした。彼女たちは二人とも、私という人間を創り出したオリンポスの神なのです。

二人の母から注がれた二重の愛、その限りない恩寵は、二重のものやお互いを等しく映し出している存在への尽きることのない憧れを、私の中に生み出しました。私はいつも、反射鏡のように増殖しているものに美のオーラを感じます。とても親しみのある、力強いもの。不可能を覆す奇跡を目にしたように心が高鳴るのです。

双子の素晴らしさは、完全なる同一性が不可能であることによってこそ育まれます。ゲノムの魔法は完璧に同じ生物を作ろうとしますが、実のところ、双子は計り知れないほどの不一致と不整合を抱えながら生きているのです。それは、類似という惑わしであり、ひび割れた対称性による幻想のゲームです。

*Twinsburg*は、オリジナルとコピーの関係性に緊張感を創出しながら、このゲームをプレイします。まるで魔法のようにコピーされた衣服は、唯一無二という存在価値を失うでしょう。その結果、現れるのはよそよそしさとあいまいさ。そしてついにアイデンティティという概念が壊れかけたときに、私たちは気づかされるのです。同じに見える身体がまとっている同じ衣服が、異なる性質を放っているということ。ファッションとはつまり、連続的な増殖でありながら、あらゆる個性の最も純粋な表現を妨げることのない存在なのです。

双子の特質は不安定な矛盾の上に成り立っていて、私たちが見ているものは、必ずしも見えている通りではないという思考を駆り立てます。同じような二つのものを前にすると、私たちはどんなに些細な違いも見逃さず特定しようと、より注意深くなります。私の二人の母はそっくりに見えましたが、実際は互いを映し出すことでお互いを補完し合う関係でした。一人がもう一人と一体化しながらも、二人は決して同じであったわけではないのです。

そのような非対称的な相互関係によって、双子であることの真の意義深さを見出すことができます。それは同一でありながら異質であるもの同士の素晴らしい関係であり、異なる個性が絆で結ばれることで存在している状態です。実際に、すべての双子は生まれた時から、自分が宇宙の中心ではないことをよくわかっています。彼らはもう一人の自分と生きることに慣れていました。彼らの肉体の境界線は、彼らの存在そのものの境界線とは一致しないのです。

つまり双子であることにより、多様な自己が存在することを否応なく体験します。他者を認めること、自分が世界の一員でしかないことを認識すること。それは生物学を超越したトポスであり、この地球で旅を続けるための道標となる、共存や連帯の精神を示しています。自分が他者とのつながりの中で生きていることを認識できるかどうか、私たち人類が共有する未来の可能性なのです。

もう一人の存在を通して人生を理解した
私の双子のママたちへ

アレックスandro